

文化・文芸

✉bunka@asahi.com

月曜～金曜掲載

ウズベキスタン

日本語熱なぜ

語学から経営理論まで 教室人気

日本から西へ6千数百キロ。中央アジアのウズベキスタン。日本で日本語習熟がかつてない高まりを見せている。両国の関係は必ずしも深くはないのに、一体なぜなのか。

ウズベキスタンの首都タシケントの新しい街にあるウズベキスタン日本センター。訪れた日、ちょうど3組の日本語教室が並行して行われていた。「初級」の子どもたちが、画面に映し出される日本の習慣に関するクイズに日本語で答える。日本語を学ぶと同時に日本文化も理解できる仕組みだ。

センターはウズベキスタンの大統領令に基づいて2001年に設立され、今年で15周年。ウズベキスタン対外経済関係投資貿易省にJICA(国際協力機構)と国際

交流基金が協力する形で運営されており、所長の高田裕彦さんはJICAからの派遣である。来館者数は年間約6万人。活動の柱の一つが日本語コースだ。初級、中級、中上級、上級があり、いずれも期間は3カ月。学費は44万スム(日本円で約1万5千円)で現在、250人が学ぶ。対象年齢は10歳以上で、これまでに8500人が卒業した。

これと並んで人気があるのがビジネス学院だ。経営専門コース、若手経営専門コースなどがあり、日本の「戦略的経営」や「カイゼン」などを学ぶ。講義はロシア語で行われ、学んだノウハウをもとにメーター付きタクシー(ウズベキスタンではタクシー料金は交渉が基本)の会社やブックカフェなどを起業した人もいるという。

ウズベキスタンではもともと、タシケント国立東洋学大学をはじめとする高等教育機関が日本語学習の中心的役割を果たしてきた。東洋学大では、当初、日本語を教える教員は菅野裕子さんのみだったというが、今では学科専用の図書館とパソコンルームを持ち、日本語学科で200人以上を教え



ウズベキスタン日本センターで9月に

ウズベキスタンではもともと、タシケント国立東洋学大学をはじめとする高等教育機関が日本語学習の中心的役割を果たしてきた。東洋学大では、当初、日本語を教える教員は菅野裕子さんのみだったというが、今では学科専用の図書館とパソコンルームを持ち、日本語学科で200人以上を教え

戦後、捕虜の勤勉さに敬意 ■ マンガもきっかけ

ウズベキスタン

中央アジア5カ国の一つで、人口約3千万人。面積は45万平方キロメートルで日本の1.2倍。住民はウズベク系が8割で、公用語はウズベク語。サマ

る。「彼らの学習意欲は本当に高い」と菅野さん。

東洋学大などと提携し、中央アジアからの留学生を定期的に受け入れている筑波大学の小野正樹教授(日本語教育学)によると、ウズベキスタンの人たちは公用語であるウズベク語のほか、ロシア語など、多くの人が日常的に数カ国語を話すという。他国の言葉を学ぶことへの抵抗感が薄いのかも示れない。

しかし、同国在住の日本人は15年現在で百数十人。14年度の貿易額も東アジアでは中国が45億ドル、韓国が20億ドルなのに比べ、日本は2億ドル。日本企業もほとんどなく、日本語を勉強してもあまりメリットはなさそうに見える。にもかかわらず、ウズベキスタンの人たちの日本への関心は高い。

ルーツにあるのは、かつて抑留されていた日本人捕虜たちの働きらしい。

ウズベキスタンでは第2次世界大戦後、ソ連によってシベリアに抑留されていた日本人捕虜の一部が45年から動員されて国立劇場やダムなどを造ったという歴史があり、その働きと誠実な態度は今も語りぐさになっているという。取材中も色々な人たちから

「日本人は勤勉で家族を大切に

ルカントをはじめ、シルグロードにちなむ世界文化遺産や観光地が多いことで知られる。四半世紀以上にわたって統治を行ってきたイスラム・カリモフ大統領が9月に死去。12月に大統領選が行われる予定。

とよく似ている」との言葉をかけられた。

日本のポップカルチャーに興味を持つ若者も多い。日本センターにも新刊のマンガ雑誌などが山積み。「日本語を学ぶ若者に学習動機を聞くと、大抵、『マンガをきっかけにして日本に興味を抱いた』という答えが返ってくる」と高田所長は話す。

エスニック・コミュニケーション文化に詳しい駒沢大学大学院の白水繁彦教授は、ウズベキスタンに限らず、「日本文化が好きなの人多くは、『就職に役立つから』というような実利的な目的だけで語学を学習するわけではない」と指摘する。「私の研究科の留学生も最近経済・経営からタレント、TV番組、女性雑誌など、日本のポップカルチャーやメディアに研究対象がシフトしてきている」

タシケントには中国人や韓国人も多く、両国とも自国の言語や文化を伝えることに努力を傾けているが、日本センターの存在感は決して劣ってはいなかった。

自分たちと似た国民性を有し、高品質な工業製品やポップカルチャーを生み出し続ける日本。そこに生じる親近感と憧れこそが、ウズベキスタンの日本語熱の根っこにあるのではないだろうか。